

デューイ「学校と社会」 第2章 学校と子どもの生活

岩波書店 1975. 7. 25

第二章では学校の内部における子どもたちの生活と学校との関わりについて述べられている。教室に机や椅子、教科書、カリキュラム等が存在することが当たり前と置いていたが、実はそこには指導者側（社会）の子どもを「受動的」に扱わせる意図が仕組み込まれていた。しかし、子どもは活動する瞬間に、自らを個性化し、各自それぞれにはっきりと個性的な人間になるのである。

「旧教育は子どもたちの態度を受動的にすること、子どもたちを機械的に集団化すること、カリキュラムと教育方法が画一的であることをあきらかにするために、いくぶん誇張して述べてきたかもしれない。旧教育は、これを要約すれば、重力の中心が子どもたち以外にあるという一言につきる。(p. 49)」この章の課題？

学校教育の目指すべき組織は子どもが中心となり、その周辺を教育の諸々のいとなみが回転するものである。(p. 50) と述べている。つまり、学校では生活することが学習であり、子どもの成長を促進するあらゆる手段がそこに集中されている。そうであるならば、子どもはものを聴く存在である、ということにはならない。(p. 52)

興味をたんに刺激する、或いはほしいままにさせることと、興味を指導することによってそれを実現させることとのあいだに存する差異であって、この差異を強調したいのであるとデューイは述べている。子どもが持った興味をほしいままにさせ、生まれた「成長」より、子どもの興味を具体的なものにし、それから何を為したのか、何を為さなければならないのかという意識まで導く指導によって生まれた「成長」の方が価値があると解釈する。

学校で利用できる子どもの衝動を4分類する。

衝動（目的を意識せず、ただ何らかの行動をしようとする心の動き）

- ・社会的本能（コミュニケーション能力）言語本能は子どもの社会的表現の最も単純な形式である。だから、言語はあらゆる教育的手段の中で重要なもの。(p. 60)
- ・制作の本能（構成的衝動）探求の本能は構成的衝動と談話的衝動との結合から生ずるもののように思われる。(p. 61)
- ・芸術的本能（表現的衝動・芸術的衝動）

これらの興味（衝動）こそは自然の資源であり、投資されざる資本であって、子どもの活動的な成長はこれらの興味をはたかせることにかかっている。(p. 63)

ここにあげられた「衝動」を利用するためにはいかに指導者が「意図した活動場面」を準備しなくてはならないのでは？子どもが目的を持っていない分、こちらが明確な目標をもっておかなければいけないのでは？

もともと、「言うことを聞く軍隊の作成」を目的とした学校では、今日でも教科書や教師からの学びをそのまま発表する「復唱」がベースであったが、本来子どもは自己の経験を語り、他の経験を自己のものとしようとする社会的欲求のかたまりであるため、その欲求を利用することで学習はいっそう洗練され、充実されるのである。

学校は子どもが実際に生活する場所であり、子どもがそれをたのしみとし、またそれ自体の為の意義を見出すような生活体験をあたえる場所であることが最も望ましいというべきであろう。(p. 74)

教養とは、想像力が、屈伸生において、範囲において、感入の度合いにおいて成長して、ついに個々人の営む生活が自然の生活と社会の生活によって浸透されるにいたるような、そのような想像力の成長のことをいうのである。(p. 77)